



羅針盤

宮地 良樹

Yoshiki Miyachi

滋賀県立成人病センター病院長・京都大学名誉教授
Visual Dermatology 編集協力者



ヘルペスのように「地を這う」 わが皮膚科臨床の道標

ヘルペスというのはギリシャ語で「地を這う」というのが語源だそうだが、私の36年間の皮膚科臨床を顧みると、まさにヘルペスの水疱が皮膚を這うように拡大するのも似て、そのときどきに遭遇した症例に触発されて、脈絡なく興味の対象が燎原の火のごとく飛び火する様相を呈している。その意味では私の臨床スタイルは、皮膚疾患にたとえばヘルペスよりも膿痂疹なのかもしれない。よく「先生の臨床のご専門は何ですか？」と訊かれるが、返答に窮する。私には臨床の専門というものがないのである。「ないですね」と答えると、たいいてい人は当惑した顔をされるので、今回の特集では、その質問に答えるべく、なぜ私の興味の対象がかくも多岐にわたっているのかを「忘れ得ぬ患者さんたち」を通して検証してみようと考えた。

今回の「忘れ得ぬ患者さんたち」のほとんどは、私が若いころ、主治医として遭遇した患者さんたちである。それだけ、若い時代の研ぎ澄まされた感性で接した患者さんたちは自分にインパクトを与え、強い印象が残っているであろう。また、その患者さんたちに触発されて自分の研究テーマを設定したことも、私の皮膚科医人生の大きな道標となった。群馬大学や京都大学の教授になってから回診で診た患者さんたちも、教室の研究テーマに大きな影響を与えた。

私は回診ではことさら、担当医に素朴な疑問を投げかけるように心がけてきた。それは自分がまだ若いころ、太藤教授の回診でのひとことで研究テーマを決めたことが大きく影響している。患者さんや臨床で感じた疑問を解決するために臨床研究を始めるのが一番リーズナブルな研究の動機づけだと信じているからでもある。恩師からは、「カネと機器があれば誰でもできるような研究はするな」と教え込まれてきた。臨床の疑問から発し、それを解決することで患者さんに還元できる臨床研究が一番意義深い、という価値観を墨守してきたが、それは今でも臨床医の研究ポジショニングとして正しいと信じている。だからこそ、素朴な疑問をぶつけることで、担当医や指導医が、その力量に応じた疑問解決のための次のステップに踏み出すことを期待していたのである。

こうして、「忘れ得ぬ患者さんたち」をあらためて通覧してみると、確かに私の臨床の興味の対象ベクトルは錯綜していて、いかにも統合性がない。しかし、それは逆にいえば、一例一例の症例から、私は必ず何か少なくとも一つは学んできたことを示唆している。私は臨床を集大成するような金字塔を建てることはできなかったが、わが「地を這う」皮膚科臨床の足跡は、若い先生たちに、症例を大切にすることから「症例に学び考える皮膚科」の重要性を指し示す「道しるべ」となるのではないかと、ひそかに期待している。